

福岡平野における弥生文化の成立過程

狩猟採集民と農耕民の集団関係

The Formation of Yayoi Culture in Fukuoka Plain

藤尾慎一郎

はじめに

① 目的

② 方法

③ これまでの弥生文化成立期の土器編年

④ 弥生早・I期土器編年の修正と甕組成の現状

⑤ 諸遺跡のもつ条件

⑥ 福岡平野における弥生文化の成立過程

⑦ 狩猟採集民の農耕民化過程

おわりに

【本文開始】

弥生文化は、縄文文化と新しく大陸から入ってきた文化があわさって成立するが、その際、縄文人と朝鮮半島に出自をもつ渡来人のどちらが主体的な役割を果たしたのかという点をめぐって長い間論争がおこなわれている。いわゆる縄文人主体説と渡来人主体説である。

これらの議論は、縄文文化と弥生文化のもつ諸要素を比較して連続性と非連続性を抽出し、そのどちらかを強調するという方法に特徴があった。しかしいずれの要素もこの文化変容を考える場合には重要であるし、片方だけを取り上げて強調する姿勢は方法的に正しいとはいえず建設的でもない。

本稿では、狩猟採集民が農耕民化することからすべては始まったという枠組みでこの文化変容をとらえ、その過程で縄文人と渡来人が実際に果たした役割を明確にすることによって、議論の基礎となる弥生文化の成立過程の実態を明らかにすることを目的とした。

まず福岡平野の遺跡ごとに、煮炊き用土器である甕の保有形態と水田の種類、遺跡が造られてからの発展過程を調べた結果、農耕民化へと縄文人をうながした契機、農耕民化が達成された時期と場所、農耕社会化への過程、土器の保有形態に違いをみせる三つのタイプの農耕民化が存在したことを確認した。

那珂タイプ、板付タイプ、四箇タイプと仮称した三つのケースのうち初めの二つは、縄文人と渡来人の双方がそれぞれの目的をもって共に生活集団を作ることからはじまり、農耕社会化を目指したものであった。役割分担はもちろん存在し、決してどちらか一方の主体性のもとに進行した現象ではない。

この文化変容は少数民族の西洋文明化を考える場合のケーススタディでもあり、少数民族主体説や西洋文明主体説が成り立たないのと同じ性格のものと考えられる。